（別紙２）

審査結果の要旨

氏名　門脇　俊介

『理由の空間の現象学――表象的志向性批判』との表題をもつ本論考は、表題からも窺えるとおり、一貫して「表象的志向性」を批判的に検討することにより、新たな「現象学」――「理由の空間の現象学」――の確立を目論むものである。

それによれば、とりわけ現象学によって主題化された「志向性」――何らかの対象へと向かうという心的状態の特性――は、実は種々の哲学説において中心的な役割を果たすものなのだが、こうした志向性が、多くの学説において、「表象的志向性」と捉えられた。それにより、二つのタイプのいわゆる「表象主義」が成立した。その第一のタイプ（「表象主義１」）は単純に、心的な世界表象が外的な対象（知覚対象）と対応すると考えようとするもので、本論考によれば、これは端的に却下されるべきものである。慎重に検討されるべきは、第二のタイプ、すなわち、カント、フレーゲ、デイヴィドソン等に代表される「表象主義２」である。それは、全体論的な脈絡において成立する、明示的命題的な理由付けの推論連関（「理由の空間」）を説き、かつ、これを単に客観世界に対応する世界表象と見なすのではなく、世界そのものへとコミットする機序であると――つまり、「理由の空間」が世界そのものであると――捉えようとするのである。

とりわけこうした「表象主義２」の批判的検討によって、本稿の提起することは、この「理由の空間」には、これを可能にしているさらに根底的な非明示的・非命題的・非推論的（あるいは前明示的・前命題的・前推論的）な「地平」が存していること、この「地平」が主題化され、一層根源的な志向性が論じられること（「反表象主義」）によってこそ、「表象主義２」の趣意も生かしうるということ、そして、フッサール、ハイデガー、さらには実はアウグスティヌスが、こうした「反表象主義」――新たに提起されるべき「理由の空間の現象学」――を、すでに相当程度明確に説いていたのだということ、である。

こうした論議が展開される本論第一章においては、そもそもフッサールの提起する「志向性」とはいかなるものかが、詳細に論じられる。それによれば、その「志向性」の最も基本的な形態は「信念」である。その「信念」とは、「科学的な仮説」のように命題として明示的に表明されるものから、およそ非明示的な、身体動作等に関わる最も基底的なもの――地面が固いという歩行中の非明示的信念――までを含み、かつ、そうした諸々の信念が、相互に連関して「全体論的なネットワーク」（すなわち、「地平」）をなしているという、そうした総体である。フッサール現象学の企図したことは、こうした信念体系を、

「あらゆる断定や先入見を停止して」再構築することである。ただしその際重要なのは、この信念体系が総じて「直観によって正当化される」ということ、つまり、信念体系とは直観される世界そのものだということである。

この世界そのものである信念体系（「地平」）こそが、「反表象主義」的な「理由の空間」を形成する。それは、世界に対峙する主観的な信念体系（表象）であるのではなく、世界そのものなのであり、かつ、命題的・推論的な理由付けの連関を基礎づける、前命題的・前推論的な地平としての「理由の空間」なのである。

しばしば「表象主義」の代表格と見なされるフッサールの現象学も、本論考によれば、実はこうして「反表象主義」――新たな「理由の空間の現象学」――へと一歩踏み出していたのである。

第二章、第三章は、同様の志向性論が、既存の言語論批判という形で展開される。すなわちサールの提起する重要テーゼは、「言語は志向性に依存する」である。しかしこれによっては、言語と志向性（われわれの関わる世界）とが独立であると見なされ、言語が単なる心的なものとされざるをえない（「表象主義１」）。重要なのは、かのテーゼが「志向性は言語に依存する」によって補完されるべきことである。また、言語を「客観主義的な」存在「規範」――客観的世界と正確に対応する存在モデル――と見なす「客観主義的規範主義」（ある観点からのデイヴィドソン）も維持することはできない（「表象主義１」）。これらは総じて、「表象主義２」でありつつ「反表象主義」へ道をも拓きうる「解釈主義的規範主義」（別の観点からのデイヴィドソン）へと洗練されなければならない。

第四章の主題は、「意図の自立性」である。客観的世界とは独立の、心の内なる世界としての「意図」なるものが、存立するのかどうか。むろん本論考によれば、そうした「意図」の存在（「表象主義１」）は、否定される。心の内なる意図が原因となって作用を身体に及ぼし、身体が世界に関与するという構図は、採れない。この構図を、目的論的な観点を導入することにより、「表象主義２」の方向で保持しようとしても根本的な困難は解消されえない。意図の真の位置づけは、ハイデガーの行為論の観点（「反表象主義」）が視野に入れられることにおいてはじめて、明確にしうるのである。

第五章において、そのハイデガーの行為論が主題化される。それは、カントの超越論哲学――主観的な規範が客観世界のあり方そのものである――の明瞭な影響下にあるとされるが、本論考によれば、その影響下、『存在と時間』においてかの「地平」が、相互連関する「存在者」の全体、つまり、「道具連関の全体」と捉えられ、それが「適所性の全体」と表現される。その意味は、「地平」（「表象」）が決して「心の内で表象されている」もの（「表象主義１」）ではなく、世界そのものだということ（「表象主義２」）、そしてそれが間違いなく、かの基盤としての「理由の空間」なのだということ（「反表象主義」）、である。

最終章、第六章において、一転して中世の代表的思想家アウグスティヌスが主題化され、この思想家においては、「知覚の目的論と行為の目的論との連接」が視野に捉えられており、ここに包括的でこのうえなく内容豊かな目指すべき「現象学」――「理由の空間の現象学」――の萌しが明瞭に見て取られうるという。

こうして本論考は、実に詳細かつ見事にいわゆる現代哲学を中心とした批判的考察――表象的志向性批判・表象主義批判――を遂行することにより、自らの斬新で先端的な哲学説を慎重かつ確実に彫琢しようとする、哲学的思索の結実である。むろんこの哲学的思索は、なお緒に付いたばかりである。そこには例えば、「表象主義２」的な「理由の空間」と「反表象主義」的な「理由の空間」との関連づけといった問題が残されていよう。それは、現代哲学のトピックである身体還元論的な自然主義との対決という困難な問題だが、この点をめぐっての説得的な論議がなお期待される。また、本論考の主旨に即した、フッサール、ハイデガー、両哲学の全面的な再解釈も、なお期待されよう。

もちろん、こうした点を考慮しても、本論考がそれ自体すでに、内実豊かな真正の哲学論考であることにいささかの変わりもない。

審査委員会は、本論考が博士（文学）の学位を授与するに値すると判定する次第である。